

図書ニュース

第4号

2014.9.30 発行

I 名作の社会学の試み

今年の夏、小説『**こころ**』の新聞連載100周年を記念して《夏目総選挙》が行われていた。皆さんなら清き一票をどの作品に投じるだろうか？漱石作品を全部読んだわけではないから、飽くまでも読んだ中での話でよい。私のイチオシは、「北野図書館報 第80号」でも「読みやすさと歯ごたえのバランスの良さで断然」と書いた『**坊っちゃん**』である。何度でも読めて噛めば噛むほど、否、読むほどに味わいが深まるから、やはり好きな名作というしかない。（どうかこだわりなく、漱石の作品を沢山読んでみてください。）

名作はもちろん様々な読み方ができる。鑑賞の多様性を許すのはその奥深さの故である。かつて私は、『坊っちゃん』という不朽の名作が描く世界【fiction・虚構】を現実【fact または real】であると見て、社会学をツールに読み解いてみた経験がある。昔、上野千鶴子サンが「社会学者とは、人間の想像より現実のほうがもっと豊かだ、と思うひとびとのことである。現実より想像のほうが豊かだ、と思うひとは、作家に向いている」と的確におっしゃっていたけれど、作家に向いてない私には、豊かな現実への切り口の方に興味が湧いてくるわけである。

新たな視界が開けそうな3つの観点を簡単に示しておこう。

一つは教育社会学から。明治30年代後半に私立の中学校を出て東京の物理学校を卒業、四国で中学教師となり、短期間で東京に戻ってからは街鉄の技手(ぎて)になったという学歴やキャリアをたどることで、坊っちゃんの社会移動(エリート度)について検討することができる。

次は地域社会学から。キーとなるのは、「狭いけれ何でも分りますぞなもし」(二番目の下宿先となった萩野の婆さんの科白)という言葉である。坊っちゃんが経験した松山での生活からは典型的なムラ社会(村落共同体)の本質が明らかになってくる。

今一つは小説『坊っちゃん』は人生における「通過儀礼」を描いているという読みである。「通過儀礼」という概念は、フランスの民族学者 ヴァン・ジェネップによれば、分離 ⇒ 移行 ⇒ 結合という3つの段階を踏まえる。「親譲りの無鉄砲で小供の時から損ばかりしている」という有名な書き出しに始まり、四国行き[分離]から中学教師の間の試練[移行]を経て、可愛がってくれた婆さん、清(きよ)の尊さを悟り、人としてのアイデンティティーを確立していく[結合]という道筋から、これは移行の段階を中心に描かれた通過儀礼小説といってよい。主人公の大人への成長の物語にこそ、作者と読者をつなぐ共感の秘密が潜んでいると私は思う。

社会学とは「ものごとはみかけどおりではない」とする学問である。3つの観点による試みもこんな『坊っちゃん』の読み方も成立するというふうに理解してもらいたい。人生において、新たな視点と着想を得て、視野を広げるためには《このこ》と知的世界を歩き回ることが有効だ。とくに将来の可能性ある高校生なら、ぜひ広く読書の世界をうろついてほしい。というわけで、北野の図書館で書架e(社会科学)の周囲を巡ってみた。

【注 書名の後ろにある(377/B2/1)等の記号は図書館での請求番号、また、**太字の書名**等も図書館に蔵書があることを示す】

Ⅱ 作品世界と書架(e)を巡って出会った本

① 馬場 錬成『物理学校 — 近代史のなかの理科学学生』（中公新書ラクレ）（377/B2/1）

『坊っちゃん』には、「幸い物理学校の前を通り掛ったら生徒募集の広告が出ていたから、何も縁だと思って規則書をもらってすぐ入学の手続をしてしまった。今考えるとこれも親譲りの無鉄砲から起った失策だ」とある。物理学校は、現在の東京理科大学の前身で、**岩波文庫**本や『**漱石全集**』では、この学校には中学卒業者は無試験入学が許されたが、卒業出来る者は僅少だった。卒業生は程度が高いという世評があり、大半は中学教師となったと注釈が付いている。この物理学校について、明治14年の創設以来、16名の同志たちによって支えられながら昭和26年3月末の閉鎖を迎えるまでの70年の歴史(変遷と人物群像)を、愛着と誇りを持って綴ったのが上記の本(以下、本①のように記す)である。

この本を読んで、こんなことが分かった。坊っちゃんが3年間、神田の小川町へ下宿していた理由である。物理学校は明治19年～39年まで、レンガ作りの「小川町校舎」で授業を行っていた。もとの下宿近くの学校前を偶然通り掛って入学した坊っちゃんは、在学中、便利なのでそのままその四畳半に留まったわけだ。

漱石と学校創設者の一人中村恭平とは、小説の執筆当時親交を結んでいた。一回り年長である中村は、日記に「今日も金之助(漱石の本名)が来た。相変わらず、ずうずうしい男である」と書き残し、『**吾輩は猫である**』の主人公 苦沙弥先生のモデルの一人でもあったらしい。東大助教授であった中村は、夜になると物理学校の教師であり、実質的に学校の経営を切り盛りしていた。漱石はそれを知っているからこそ、坊っちゃんを物理学校卒業の数学教師にしたのである。

これらは小説世界に結構リアリティーがあるという話だが、坊っちゃんが「三年間まあ人並に勉強はしたが別段たちのいい方でもないから、席順はいつでも下から勘定の方が便利であった。しかし不思議なもので、三年たったらとうとう卒業してしまった。自分でも可笑しいと思ったが苦情をいう訳もないから大人しく卒業して置いた」と言うのを真に受けるわけにはいかない。わが坊っちゃんの卒業は明治38年7月と考えられる。本①に掲載されている明治時代の同校入学者数と卒業生数の記録によれば、入学したはずの同35年の延べ入学者は894名で、そのうち卒業したのは何と26名、単純計算で卒業率は2.9%であった。卒業率は明治を通じて2～3%代が多く、後半になってようやく10%近くまで上がる。このような経営をした学校は他に例がなかった。先に触れた如く、物理学校は、入学は誰でもできるが、卒業するのは極めて難しい学校だった。

となると、坊っちゃんが人並の勉強で3年でストレートに卒業できたことは、不思議どころかおかしいどころか、「奇蹟としか言いようがない」、彼は「理科系の天才だったに違いない」という意見も出てくる(小池 滋『「坊っちゃん」はなぜ市電の技術者になったか』新潮文庫)。本①では、実際の状況とは正反対の描き方を、多分、漱石のいたずら心、ユーモアが意図的にそう書かせたに違いないと解釈している。漱石は正反対を書けるほどに実情を知っていたのである。

② 竹内 洋『立志・苦学・出世 — 受験生の社会史』（講談社現代新書）（376/T2/1）

「一体この赤シャツはわるい癖だ。誰を捕まえても片仮名の唐人の名を並べたがる。・・・おれのような数学の教師にゴルキだか車力だか見当がつくものか、少しは遠慮するがいい。いうならフランクリンの自伝だとか『プッシング・ツー・ゼ・フロント』だとか、おれでも知っている名を使うがいい。」この可笑しみと歯切れの良さが何とも魅力的だ。その言葉遣いや文体に漱石の落語好きの影響を見するという作家 川上弘美さんの意見には同意したい。

さて、フランクリンはともかく『プッシング・ツー・ゼ・フロント』Pushing to the Front BY ORISON SWETT MARDEN は今では余りポピュラーだとは言えない。しかし、『漱石全集』等の注解によると、実利主義を説き、前者(『フランクリン自伝』)同様中学校の教科書によく使われたから、当時は坊っちゃんでも知っていて当然だ。半ば忘れられた格好の著者マーデンだが、1897年に彼がアメリカで創刊した雑誌『SUCCESS』に倣い、日本でも静岡県出身の村上濁浪が明治35(1902)年にその名も立志独立進歩の友『成功』雑誌を刊行、大正4年まで続いて人気があった。『プッシング・ツー・ゼ・フロント』や『成功』は現代もある自己啓発本やサクセス情報誌の先駆けといってよい。

『成功』に関して、本②で、著者の竹内氏は同じ漱石の小説『門』に出てくる次のようなシーンを紹介している。「(宗助は)それから『成巧』と云う雑誌を取り上げた。その初めに、成巧の秘訣という様なものが箇条書にしてあったうちに、何でも猛進しなくっては不可ないと云う一カ条と、ただ猛進しても不可ない、立派な根底の上に立って、猛進しなくってはならないと云う一カ条を読んで、それなり雑誌を伏せた。」広く漱石を読む上での示唆に富む部分だと思うが、フォーカスを坊っちゃんに戻そう。

坊っちゃんは、まさに『成功』イデオロギーの時代を生きた。竹内氏はまた『成功』が明治30年代以降の「苦学ブーム」に対応した雑誌だったといい、苦学生活の例として新聞配達と人力車夫のそれをあげ、併せてサバイバル率の低さに言及している。兄から600円という金を貰った(贈与された)坊っちゃんは苦学とは無関係だったと考えるなら早計だ。というのは、彼は中学卒業前におやじも亡くした後、「おれは東京でまだ学問をしなければならない」と決意したうえ、「牛乳配達をしても食ってられると覚悟をした」からだ。たまたま贈与を得て、その使用法を考えた結果、「今のようじゃ(中学校卒業だけでは)人の前へ出て教育を受けたと威張れないからつまり損になるばかりだ」と思い定め、これを学資にして物理学校への進学(昼間部か夜間部かどちらに入学したのか明らかでない)を選んだ。坊っちゃんも苦学空間と時代の子であったことは間違いない。

本②は、明治後半期における<受験生>の誕生前後より始め、本格的な受験の時代から平成初期の受験のポストモダンまでを扱い、近代日本の受験的生活世界を社会学者らしく解明している。受験生活が他人ごとではない北野生だからこそ、歴史的な受験現象を「姿見」の代わりに自らを相対化することの意味は小さくないと思う。その上でPushing to The Front (前進あるのみ)

③ 蛭川 幸茂『落伍教師』と『続 落伍教師』(復刊『落伍教師』刊行会)(370/H4/1・2)

「宿直部屋は教場の裏手にある寄宿舎の西はずれの一室だ。ちょっと這入って見たが、西日をまともに受けて、苦しくっていたたまれない。田舎だけあって秋がきても、気長に暑いもんだ。生徒の賄を取りよせて晩飯を済ましたが、まずいには恐れ入った。よくあんなものを食って、あれだけに暴れられたもんだ。」有名な寄宿生の騒動は後の(旧制高校での)ストームを思わせる。所謂学園物の場合と違って、坊っちゃんは学校というところを決してよくは言わない。ただ真っ直ぐに生きようとする。本③を読んで、著者の破天荒な生き方にも何かしら通ずるものを感じた。

著者名の「蛭川幸茂」は記憶にあった。若い頃読み耽った北杜夫の『どくとるマンボウ青春記』には、ヒルさん、ヒル公と記してあり、変な名前なので印象が残った。案の定、表紙側の推薦のことばは北さんが書いている。因みに、裏側の方には元同僚のドイツ文学者 手塚富雄氏のそれが載せられているが、その名前も高校時代の「現代国語」教科書(筑摩書房)の中に覚えがある。

蛭さんは、旧制松本高等学校随一の名物教授だった。本③には無論松高の寄宿舎(寮)のことが出てくるが、蛭さんは宿直どころか、3年近く学校の真ん中にある弓道場へ家で住んでいた。

随処にそうした無茶ぶりが溢れ、健康法の面など受容し難いことも多々、陸上競技への偏愛ぶりにも付いて行けないが、それでいて中身は無類かつベラボーに面白い。

蛭さん晩年の一言。「俺は教師は落伍したけれども、教育には落伍しなかったと、今こそ胸を叩いて大呼することができそうだ。」これからの私は何が言えるだろうか。

④ 橋本毅彦＋栗山茂久[編著]『遅刻の誕生 — 近代日本における時間意識の形成』(365/H2/1)

坊っちゃんと言う。「今まで物理学校で毎日先生々と呼びつけていたが、先生と呼ぶのと、呼ばれるのは雲泥の差だ。・・・先生と大きな声をされると、腹の減った時に丸の内で午砲(どん)を聞いたような気がする」と。「どん」は、旧江戸城本丸で撃った正午を告げる大砲の音で、本④によれば、明治政府によって鉄道時間の標準時に設定されたものである。

江戸時代の日本は、日出と日入を基準とした不定時法(昼と夜の時間をそれぞれ等分して時間を計る)を採っていたから、季節によって時間の長さもまちまちであった。欧米とは時間感覚が違うから、幕末の日本人は時間を守らないと、律儀なお雇い外国人達を悩ませた。これが太陽暦の採用された明治6年1月1日以降、時計の針に合わせる定時法に改められる。維新後の日本は時間意識の近代化とともに、やがて世界の先進国の仲間入りを遂げた。時間とは労働の量を測り、利子の額を決定する経済的意味をもつという「タイム・イズ・マネー」(フランクリンの言葉)こそ資本主義の精神の象徴である。今や日本人は、世界一正確に運行される鉄道のように、スケジュール管理をする国民になった。

本④の課題は、遅刻が遅刻として見なされるようになる(遅刻が誕生する)由来を問うところから始まっている。明治30年代の『坊っちゃん』にも、「山嵐もいつの間にか来ている。欠勤だと思ったら遅刻したんだ」とか、「ところへ待ちかねた、うらなり君が気の毒そうに這入って来て少々用事がありまして、遅刻致しましたと慇懃に狸に挨拶をした」と出てくるから、中学校の時間規律は相当に浸透していたことが分かる。時間割は子どもに時間厳守を教える隠れたカリキュラムであった。また、「駐車場の時計を見るともう五分で発車だ。・・・赤シャツは駆け込んだなり・・・まだ三、四分ある。あの時計は・・・二分ほどちがってるといいながら、おれの傍へ腰を卸した」とあるのは、鉄道の発達が社会的な時間意識の変化に大きく関わったことの証左だ。漱石はイギリス留学の経験からか、鉄道に関心を示した文学者であるが、本④ではその具体的な作品例として『草枕』と『三四郎』(今秋10月1日から新聞に再連載が始まる)を挙げている。

本④は最後に、現代人の忙しさのルーツを探り、今後の時間のゆくえ(使われ方)を展望しようとしている。巻末には時間をテーマとする50の図書が紹介され、その一つがミヒャエル・エンデの小説『『モモ』』である。人に有意義な時間を与えるモモと、灰色のコートを着た時間ドロボウの物語は、現代社会の時間論を考えるためのとてもよいヒントになることだろう。

Ⅲ 番外 — 校史『北野百年史』から (090/K2/1)

分厚い校史をめくっていたら、夏目漱石と北野の縁について記述があった。本校が「大阪府立北野中学校」となった時期の太田達人校長は、晩年の自伝的作品『硝子戸の中』で高等学校にいた頃の友達○として登場する人物だという。作品には実名も出てきて、「私は彼を想ひ出すたびに達人といふ彼の名を考へる。すると其名がとくに彼のために天から与へられたやうな心持になる。さうして其達人が雪と氷に鎖ざされた北の果に、まだ中学校長をしてゐるのだなと思ふ。」とある。北の果の樺太は、太田校長最後の赴任地である。本校の歴史の深さを知ったことでもあった。